

メリメ作「ラ・ジャックリイ」の

現代的意義について

——その政治文学的評価——

一、序

バルザックが印刷し、戯曲の体裁を持っているこの作品は、一八二八年六月に初めて公刊された。二百ページに及ぶこの長篇作は、ルイ・アラゴンによって再評価されるまでは、殆ど誰も相手にしなかつた (cf, Louis Aragon : 《La lumière de Stendhal》éd, Denoël)。メリメに関する浩瀚な研究書を著わしたビエール・トラアール教授は、作品「ジャックリイ」(《La Jacquie》: 《Théâtre de Clara Gazul》éd, Charpentier 1845 に同載のもの)を私は底本に用い、適宜 《La Jacquie》éd, La Bibliothèque Française 1946 を参照した。後者にアラゴンの論文が附加され、後アラゴンは前掲書にこれを転載した。この文学的価値をまず否定し、時代の生命の表現に失敗したとして、結局歴史的な見地に立っても酷評を下している (cf, Pierre Trahard : 《La

新井美史

jeunesse de Prosper Mérimée》t. 1. éd. Champion)。これに反し、一九四六年、対独レジスタンスを体験後のアラゴンは次の様に、この作品の今日的意義を認識した。

「ドイツの占領、国内の裏切で、フランスが蒙った、恐ろしい戦争のあと、一八二八年のこのテキストを私たちは新しい眼をもって読んでみる。この本には、すべてのものがこだまを伝え、私たちに話しかける。この本はすべての人の手に渡らなければいけないのだ。」(「スタンダールの光」関義氏訳による)

この作品が芝居の形をとっていても、古典的な演劇理念からいって、めちやくちやな作品であり、ロマン派の自由な芝居としても、決して成功していないこと、シェイクスピアの形骸だけを探り入れて、そのポエジイを体得していないこと……かかる一般的な非難の全てを認めよう。要するにこれは、ドラマのない、ひき出し、戯曲 (Plice à tiroirs) だらけなのである。これは、いわゆる美学的な

意味での「傑作」ではないかも知れない。しかし「ラ・ジャックリイ」は、これとは別の生命を、今後も充分に生き続けることが出来るように思われる、即ち問題劇としての生命を。

私は、この作品に表われた政治社会観的な方面に興味を抱いた。それのみならず、この作に関して、メリメの全著作の中にあつても、彼の政治社会思想の変遷上、少なからぬ重要性をもつものと信じた次第である。

七月革命を二年後に控えているメリメが、彼にとつておそらく最もいきのいい時代に(何故なら、三十年には彼は既にあらゆる意味で老成しているのだから)、自らの陣營を、早くも可成り悪いレアリスムによつて眺めていることを、われわれはこの作品の中に感ずるのである。ひとは、「クララ・ガスル」のメリメをロマンチスムの尖兵と見立て、この頃の彼をリベラリストの中に数え、七月革命には彼を勝利者の一人と考へた(例へば、《Trois Solitaires》の Paul Arbet)。現に、アラゴン言葉も、左翼的で同時に愛国的な可成のいき目でもつて、「ジャックリイ」の著者を評価したのではないか? だが、一方で、メリメはラディカリスムに絶望している、少くもラディカリスムの効果について彼は疑問を抱いている。彼の他の作品、例へば「にせのドミトリウス」《Les Faux Démétrius》などに、しばしばラディカリスムの悲劇が扱われている。彼の間人哲学からみても、それは上策とはいえないのである。私はアラゴンのした再評価の功績を認め、リベラリスト・メリメを肯定する。だが民衆の友として行動を共にし、下からの改革を信奉するメリメを信じない。

「ジャックリイ」を虚心に読んでみると、確かに、アラゴンの強調

しなかつた部分が眼につく。そして氏にとつてネガチヴに見えたこの部分こそ、作品「ジャックリイ」が、一九六〇年の日本社会において、相当の存在理由を見出す部分であることを、私は信じる。

六百年前の異国に起つた農民反乱のこの物語に、私がアプローチする態度は以上の様なものである。

二、「ジャックリイ」の手法

この芝居は、全体が三十六景に分たれ、一景毎に場所は移動し、時間は、農民蜂起前の状態から、それが挫折し鎮圧に至るまでに及び、筋は可成細かい脇道にそれ、エピソードな場面が連続する、といった、完全に三一一致法則を破っている点、「クララ・ガスルの戯曲」《Théâtre de Clara Gazul》に輪をかけたロマン派である。加えて、従来の劇法上の慣例は容赦なく無視され、悲劇的要素に喜劇的要素が混合し、題材から当然のことながら言語使用は雑多であり、特に著るしいのは、舞台上で血が流されること無数である。

ところで、メリメが取上げたこの作品の物語は、史実としてはどのような進行を辿つたのか、一応要約しておくことにする。

ジャックリイの一揆は百年戦争の始め、一三五八年五月廿八日に勃発した。ポーヴェーシの庶民たちが最初より寄つて、いく人かの貴族を襲い、その九人を虐殺したのが口火となり、これが広範で激烈な農民蜂起を呼んだ。火の手は、ピカルディに、イール・ド・フランスに、シャンパーニュへと拡がった。彼らはそれまで苦しんできた悲惨と不当な徴税に耐え得なくなつたのだ。ギョーム・カルルと

いう男をその首領に選び、団結して至る処の城館や街を襲つて、掠奪、暴行、殺人の限りを尽した。彼らは優勢だった。農民が大部分を成していたが、野武士や町人や労働者や僧侶も加わった。カルルは、彼らジャックたちの行き過ぎた行為を抑制せんとして、コンピエーニュのブルジョワと同盟關係を結ぼうとした。しかし拒絶を食つて、カルルはサンリスに退却した。掠奪行為は依然として続いた。カルルはパリの憲兵長官エチエンヌ・マルセルの支援をうながした。マルセルは、ジャン・ヴァイヤン指揮下のパリ人三〇〇〇人を送った。エルムノンヴィルが落ちたが、パリ人たちは農民の不規律に愛想をつかして、ヴァイヤンはカルルと袂を別ち、モーに進軍した。ボーヴェジの貴族たちはナヴァール王に援兵を乞うた。カルルはメルロとクレルモンの間で非常に強力な位置を占めていた。ナヴァール王シャルル悪王は、敢えて彼を攻撃しようとはしなかつた。カルルは奸計によつて捕えられ、時を期して貴族たちによるジャック大量殺戮が始まった。モーでは叛徒の血まみれな大敗が、ボーヴェジでは、ナヴァール王が農民を八つ裂きにした。ジャック共の村は焼かれ、二万の農民が惨殺された。六月十日だった。即ち、ジャッククリイの恐怖の反乱は二週間の出来ごとだった。月末にはフランスは全く元の平静に立ち帰った。

ひと月経つて、エチエンヌ・マルセルも殺されてしまった。

メリメは事件を史実のまゝに追つて書いたのではない。ここでもまた、彼の「私人の歴史」が顔を出している(ゲオルグ・ルカーチ「歴史小説論」山村房次氏訳参照)。彼は、彼流にエピソードを想像し、日付や事実を把われず、時代の雰囲気を出すことに一切の力を注いでいる。従つて、一貫した筋をここに要約することは容易で

ないし、さして意味もない。要は、一つの群衆劇と呼ぶにふさわしいことで、作者は、一三五八年の典型と彼が推察した人物や性格を数多く登場させ、これらの群衆をシェイクスピアに倣つて処理せんと試み、中世の農民暴動を解釈し再現したのである(トラアール教授・前掲書参照)。

ジルベール・ダーブルモン男爵を領主とするボーヴェジの貴族たちの一群、その中には、十才の少年ながら残酷を残酷とも思わない教育を施されるコンラッド、その姉にして人道的で優しい姫君イザベルが含まれる。次にシウォードとかブラウンといったイギリスの野武士、時に傭兵として封建貴族側に味方もすれば、報酬によつては叛徒と共に行動もする私利のためにモラルを持たない他国者のアヴァンチュリエの一群。ボーヴェジの僧侶の一群。次に、故あつて社会の全階級に復讐を誓つた首領ルー・ガルーに卒いられる盗賊の一群、そしてピラミッドの底辺部をなす農民たちの群。当時のあらゆる階級の間人がこうした人物たちに代表され、絞め殺された革命劇の一幕のヒーローたちとなる。ここには、エチエンヌ・マルセルも、ギョーム・カルルも、ナヴァール王も、ヴァイヤンも顔を出さない(こうした手法に関しては、「シャルル九世年代記」《Chronique du règne de Charles IX》における「読者と著者の対話」の章がよく語っている)。つまり、メリメは彼の代表者たちによつて、一三五八年の社会縮図を作っている。この点、ウォルター・スコットやバルザックの歴史物と軌を一にしている。そして、「カルメン」の筆者は、ここでも細部の描写に正確を期し、特徴的な面を把えて時代の習俗を浮き彫りすることを心がけた。

この作品の序文の中で、メリメは次の様に云っている。

——私は十四世紀の兇暴な習俗について、ある見解を明らかにしようとするのだ。で、私は自分の描写の色調を陰気にしたというよりは、これでもむしろ柔わらわらしてしまっただ位だと思う。(以下、「ジャッククリイ」の引用は拙訳、ペーシ数はシャルパンチエ版のものである。)

一八二五年頃にさえ支配的だった中世に対する誤った概念に、恋する姫君が遙かなる騎士アマデイスを夢見る古き良き時代の概念に(トラアールの前掲書参照)、メリメがかかる反撃を試みていることは、あらゆる偏見と闘う彼として別に不思議はない。従って、この革命物語全体が思い切り凄惨で、陰鬱な色合で統一されている、と一般読者は感じることである。

三、革命的暴動の実態

この対話形式による歴史的虚構作品(トラアール教授の述べるごとく、これを史劇と呼ぶのは適当でない。前述のごとき劇的欠陥が大きすぎる上に、メリメ自身これを意識し、封建情景 *scènes féodales* と副題を施し、封建劇 *drame f.* とはしていない——アンリ・パタン *Henri Patin* の指摘だそうである)は、中世の階級闘争の実相を描出せんとしつつ、随所にメリメの社会観を暗示しているように思われる。ここには、一つの革命運動の結成から崩壊に至る全過程が描かれている。作者がどのような種本を用いているかに関しては、トラアール教授の精しい考証が成されているが、貴族側に味方した伝記作家としては、たゞ一人、フロアサールにのみ負って、他は全て農民に同情をもった書物をメリメは読んだので

あるにせよ、更に、一八二八年に作者がリベラルであり、労働運動に理解があつたことを信じるにせよ、少くも、「ジャッククリイ」のメリメは、断じて、いづれの陣営にも味方していない。彼は偏見や臆断を抱くことを極度に怖れ、著作活動に当っては、専ら、世俗的意見に挑戦を試みたのである。

まず、階級なる存在に関して、この作品はどの様に処理しているかを見てゆこう。

職業を異にする各グループについては、前述したが、この雑多な集団、相互に利害を異にして敵対し合うグループが、やがて明確な二つの階級に整理され、暴動が展開してゆく。即ち、貴族と平民という部類分けである。ここには、それが宿命的な色合いを帯び、宿命的な意識を各個人が抱いている。例えば、第二景の僧院の場で、ジャン師が僧院長に選出されないのも、領主の圧力もさることながら、いかんともし難い階級的自意識が障壁となつているのである。

ジャン師^{II}さあ、拙僧に対するその取つくりいは止めて下され、見えますいますぞ。ゴデラン殿、そなたはアルトワの田舎貴族の御子息じや、してそなたイニャス殿、それからヌルピス殿、御坊がたはいづれも男爵とか何とか申す輩の御落胤じや、御自慢の通りな。あなたがたは、拙僧ごとき一介の平民の子に従いとうはござるまいて。拙僧は平民の子じや、したが、母のことは顔を赤らめずに話せませうじや。(P. 268)

イザベル姫の盾持ちとなるピエールという青年が居る。彼は身分違いの恋を感じ悩んでいる。しかしイザベルは、自分の婚約者の貴族を愛せず、ピエールにこよなく眼をかけてやる。にもかかわらず、ピエールの道ならぬ恋心を知るや、彼女の階級的自尊心はこの

平民出の男を許すことが出来ないのである。ピエールは暇を出され、叛徒に加わる。

イザベルⅡ(……)こんな凶々しいことつて今までにあつたかしらノ、そりや確かに、わたくしとしたことが、振舞いに軽率なところがあつたからこそ、卑やしい身分の男から、何という辱かしいことノ……かつとしたと云つたら、泣きたい位よノ。(P. 314)

ダーブルモン男爵領に、イギリスの野武士が攻めて来る。一人の頭目シウォードがフランス側の捕虜になる。ところが、姫君のために生命を賭して戦い、重傷を負つたピエールの馬を巡つて、奉行を交えた三人の次の様なやりとりが行われる。

シウォード(モンルーユに対し)Ⅱ拙者を、まるで小姓でもあるかの様に、徒歩で行かせなさるか？ 一人の騎士を遇するに、かかる仕打ちでござるのか？

奉行Ⅱピエール、その方の馬を、この仁に進呈せい。

ピエールⅡしかしこの私が、手負いなので。

奉行Ⅱ口答えは無用じや、従うのだ……このならず者めが、字が読めるからと申して、尊大ぶりおつて、上司をまるで同輩のようにあしらう所存でおる。(P. 294)

階級は国境を越えている。

更にイザベル姫は、後に暴力によつて彼女の貞操を奪い取るシウォードの侮辱的な仕打ちに遭う。即ち、彼女の持参金目当てに云い寄つてゐることを、この無道徳な外国人はあからさまにするのである。しかるにイザベルは自分の乳母がこの失礼な英国貴族の悪口を浴びせることは我慢出来ない(十四景)。

このように、作者は階級意識の打ち勝ち難い宿命性を、このドラ

マの根底に据えてかかる。貴族たちは、自分たちの身分を名誉とし、最大の宝とし、精神的にも、物質的にも、身分意識を彼らの存在の依り所としてゐる。この階級意識という偏見があるがため、彼ら貴族は利己的になるが、同時にまた、この偏見に適わしい美徳的な行為、雄々しい断固とした行為をみせる。支配階級の苛斂誅求や暴虐描写の一方、メリメのレアリスムは、かかる細部の習俗も正確に描こうと欲する(ダーブルモン男爵の死の場面や、フロリモンとヴェクサン奉行戦死の場など)。

確かに、騎士道華やかなりし中世の上流人士にとつて、階級の利益と名誉のために振舞うことは、国家の意識に数倍も先行してゐた。この時代は愛国心という言葉が殆んどその実質上の内容を持つていなかつたことを表現するに、メリメは成功している。ジャンヌ・ダルク出現に先立つ六十年前の事件について、われわれはここにリアルな印象を抱くのである。

このような宿命的で強固な階級意識を、農民側はどんな風を受けて取つていたか。メリメは、この方面で、本来保守的な農民を見出す。彼らには、彼らの外部ないし上層部の世界を想像することは不可能だつた。彼らは牢固として現状を受け入れているし、自ら積極的にはその運命の変更を求めない。ある百姓は彼らの悲惨を指摘され、人間平等を説かれて次の様に云う。

「わしらは、何も知らねえたゞの村人できあ、でもね、今の暮しがこんなである以上は、わしらが哀れな人種であるだけの、相当な理由があるに違えねえだよ。」(P. 295)

こうした農民の諦念に反し、叛徒の指導者を務めるジャン師の口を通して、メリメはかゝる根拠薄弱な偏見に懷疑の見解を表明して

いる。

ジャン師^{II}あの貴族共は、フランキウス王と一緒にこの国にやって来たんだ。奴らは、馬甲を着けた馬と鍛えた鉄の甲冑でもって、われ／＼の祖先を打ち破った。奴らはわれわれを奴隷にしてしまった。……だけど、もしわれわれが武器を再び取ったとしたら、もし今度はこちらから奴らを襲ったとしたら、われわれの古いゴールの血が、奴らの血と同じ位結構なものだということを見せてやれないとも思っているのかい？ (P. 319)

これはマキャベリのな考え方であり、高貴なる血統に対するメリメの皮肉である。階級意識とは、全く一つの社会的偏見以外のものではない。

革命の条件に、階級闘争があることは、今更改めて指摘する程でもない。しかるに、メリメの革命観の特殊性は、この利害を異にする二つの階級の総合的な意志が相闘うわけではないことである。以上に例示し来たところは、そこに支配する階級と、抑圧される階級が存在する、というに過ぎない。ある不詳事が起る、続いて農民が意志的に蜂起する、などの公式主義は、メリメの頭にはない。そこで、メリメは彼独自の「エリートによる革命」観を打ち出す。彼は、新しい世界の到来について現代のコミュニスト程楽観的でもないし、急激な変革を信じてもない。何故革命は失敗したか、メリメはこの作品で、この問いに答えようとしている。

ジャックたちは果して改革意識を持っていたか？ 否。彼らはただ眼前の石を取除けようとしたに過ぎない。それすら、彼ら自ら案出した智恵ではない。ジャックに対する作者の見解は、貴族の暴虐を憎むこと以上に、軽蔑的であり絶望的である。

先づ、彼らの蜂起には、二つの煽動者が必要であった。第一に英国人たちが描いてみせる祖国イギリスというユートピアが、農民たちの夢を誘う。第二にジャン師の吹き込み(いづれも四景)が、やつと彼らに別世界実現の意欲を与える。

無知なジャックたちは、それに加えて、利己的で臆病である。彼らの卑怯で意気地のないことが、圧制者にますますつけ入る余地を与えている (P. 295) とジャン師は説く。農民の破廉恥と各個人のエゴイズムとは、遂に致命的になる。まず行動を起こすに当って、エリートを必要とした彼らは、その指導者にさえ、表面切つて陰謀を打ち明ける勇氣をもつ人士を欠いたのである (第七景)。一度彼らの狂暴性に火がつくと、手に負えなくなるくせに、最後には、自ら選んだ首領に、革命失敗の責を全て転嫁し。首領を死に導くのみならず、見棄ててわれ勝ちに逃げ出すほど、非の打ち所ない腰抜けである (最終景)。即ち、かかる点に、メリメは農民の狂暴的な集団行動を認めても、組織化されたエネルギーは認めていない。

無論、ピエールとかルノーといった連中は、平民の中でも勇敢な連中である。だが彼らとて、個人的不幸をなげくのみであり、自分のこと以外は眼に入らないタイプである。階級の不幸という社会的連帯意識に毫も目覚めていない。ここに領主側が社会的觀念において自分たちの階級の利益のために結束するのと大なる相違がある。これが両者の力関係の差を生ずる物理的原因である。立ち上るといふことについても、ピエールもルイも他の農民同様、指導者の勧誘を必要とした。一度行動を起こした後もこの個人的意識は変わらず、革命運動に完全に災いしている。

ピエールは、イザベルを想う心と憎しみ以外のものが行動原理に

関係していない。

ピエールはわたしが、自分の剣を抜いたのはあの人のためだ。わたしがあなたがたの解放に意を用いていたなどとお信じか？
(P. 395)

彼ははつきりと言つてのける。更に、この才気ある青年は、共通の利害を無視して、ルー・ガルーなる野卑な盗賊に嫌悪と反感を抱いてゐる。(P. 399)。

ルノーは、妊娠した妹を、代官に蹴殺されて運動に身を投じた。だが彼は革命家ではなく、私怨を晴らすことのみが目的である
(P. 398~P. 399)。

こんな風に、各自の満足が得られ、眼前の敵が去つたら、戦いを止め、抜本的な改革を欲しない農民たちに、ある人物が侮蔑的な叫びを発する。

「可哀そうな人種だわい、鋤を引く牡牛のちよっくら、かす一組と、素適な肥料を持つこと、これが一人の百姓の野心の全てなのよ。」(P. 396)

社会の志願に対する徹底的な復讐を誓つてゐる点、彼の手足となつて働く一群の手下を掌握している点、野盜ルー・ガルーは、ジャックより多くのエネルギーを持つてゐる。彼はかつて命を救われた恩義から、ジャン師に敬意を示し、民衆運動に馳せ参じるが、実際は農民の臆病を常に軽蔑している。しかしこの男は、体制の変革を願つてゐるのではない。ただ、社会における幸運の交替を願つてゐるのみの無頼漢に過ぎない。これも従つて、近代的な意味での革命家は程遠い。

ルー・ガルーは貴族どもだけは(次の幸運から)除外するんだ。

誰でも順番つてものがあらあ。(…)俺は国王がこの俺様を男爵にしてくれるのを望まあ、そうもならねえつてのなら…(P. 390)

以上のような平民階級の短見にも理由はある。農民の土地に対する隷属という封建的運命が、彼らを抑えて離さない。彼らもまた、そのことを天与の使命としてゐる。

ルノーは土地を耕がやすにやあ、どうしたつて誰か居なくちやならねえだ。

ブラウンはい来た、そんなことなら下郎共に任せておかなくてはならぬわ。

バルテルマイは下郎共たあ何のことだあね?

ルノーはそれに、働く者が無くて、どうしてやってゆくだね? お前さんは、働き手が無けりや生きることだつて出来ねえんでせ、弓引きの旦那。(P. 395)

次に、彼らは仲間同志互いに偏狭さを身につけている。偏狭にはいろいろな種類がある。まず、些細な反感が仲間割れを呼び、大きな目的を達成するための、真の味方が誰であり何であるかを知らない。

ルー・ガルー一味は、しばしばジャックを襲撃したし、ルー・ガルーとピエールの仲は前述の通りである。要するに、彼らは融和の行動がとれない。更に階級別職業別の偏狭さがある。例えばブルジョワと下級職人との間のかけ引きの場を見るがいい(二十三景)。また最も顕著なのは愛国心の面であり、彼らのパトリオチスムは、大局的見地に立つことからは至つて程遠い。即ち真の愛国心の効益にまるで無知である。それはせいぜい土地愛の域を出ず、封建時代の農奴隷属は、習性として化している。

ルノーは俺らあここで惨めな思ひしてゐるつちゆうて、やつぱり俺

が国を愛してゐた。

モランは御領主様の土地を離れることが出来るみてえな話だあね、殿様が俺らに再び鋤の柄取らせるのはあつちゆう間だ、そんなことやつたところで。殿様が俺らの軽率な真似を罰しなざるやう口を考えただけで、俺はあ、背中が痛いよ。

(……)

ルノーは僕に俺らが自由な身であつたとすんべえ、世界を走り廻るわけじゃねえだ。ひとは自分が生れた小屋が好きなんもんじゃない。

ブラウンはフランス人はみんなこうだ。いつも奴らは不平ごかしでいるくせに、一度だつて自分から自由になろうとする勇氣がないんじやない。(P. 282)

彼ら自身、怠惰と区別するところを知らない錯覚的な愛郷心の表出がここに見られる。こうした見せかけの愛国心は、支配者側に容易に利用される。貴族と平民、上下心を一にした国土死守という甘い誘いに、ジャック共は簡単に乗つてしまふ。それはやがて彼らの階級的破滅を呼ぶ三十二層。実は支配者たちは、とつくの昔に舞台裏で、国境を越えて手を握り合つていたのである。滑稽な国家的美名を信じる農民側と、マキャベリズムに徹した支配者側の美事なコントラストがここに見られる。農民たちの理想は、日常の苦しい生活闘争のために、個人的な安楽以外に一步も出ていないからである。われわれは民衆の実態を離れて、指導者に眼を移そう。ここに一人の孤独者を発見するのである。民衆は、一つの危機に際して常に英雄の出現を必要とし、英雄を愛するものであるが、一度当面の危機が去るや、英雄は嫌われ、冷淡に扱われるものである。民衆のエイゴイズムは、一切の希望を一人の国民的英雄にかけ、一切の責任を

この個人に着せてしまつて、自ら反省するところを知らない。かかる迷妄の徒を相手に滑稽な役を演じる、暴徒の首領ジャン師は、確かに一個の哲人ではあるが、決して作者メリメの代弁者ではない。この指導者の誤算を知るのは、メリメのペシミズムを語ることになるだろう。

ジャン師は、そも／＼出発点において敗北する宿命にあつた。彼は、この規律を欠いたモップのエネルギーを信じたのである。彼はこの単なる暴動を単純にも革命運動なる組織された力に見立てた。彼の悲劇は、かかる幻影がもたらすものである。「自由という思いつきは決して一人の奴隷に生じるものではない。」と、後にメリメはある所で絶望的に云つている(「社会戦争」の序、参照)。しかるにジャン師は、農奴たちの中に革命の意志を見ようとする過誤を犯した。

ジャン師は、しかし、愛国心ある人間である。

「ダーブルモンに対する自分の憎しみにもかかわらず、英国の奴らがフランスの村を荒らすのを見てみると、私の血は湧きたぎる思いがする。」(P. 289)

彼の愛国心が、農民の偏狭な愛郷心と異なるのは、大局を誤まないことである。彼は階級闘争が当座の目標であり、それに敗れたら、彼にとつて祖国も安寧もないことを知つてゐる。従つて一人の臆病者を、味方の見せしめとして罰することを敢行せんとする。ところが、その執行人役を引き受けそうなのが、英国人であること知つた農民なちは、ここに偏狭な民主主義と愛国心を發揮して、彼らの破滅を導こうとしてゐるエイゴイズムの同胞を救うために団結する(P. 402)。ジャン師といへども、愛国心と階級の幸福の間の調整

に失敗したのである。領主たちは、平民の間に存するこの矛盾を巧妙にも利用し、操ったのである。そして支配者たちは、百年戦争を殆んど慣れ合いで戦った。要するにこの時代にあつて、近代的な國家意識に眼覚めた存在は稀であつたと云えよう。

ジャン師の次の失策は、叛徒たちに愛されようとしたことにある、とメリメは云いたげである。愛されることは、政治的に何の役にも立たず、ただ軽侮と幻滅と身の破滅を招くのみである。ジャン師のオプティミズムを、メリメは、ヴォルテールの「カンディッド」よりも陰鬱な状態に置いて皮肉つている。「愛されるよりも、怖れられよ」というマキャベリの哲学は（君主論第十七参照）、一生を通じてメリメの信奉したところであり、作品の中にも幾度か持ち込んでいる（「エトルリアの壺」のサン・クレール、「ドン・ペードル」のドン・ペードル一世、などは、かかる意味で、ジャン師の発展であり、「にせのドミトリウス」のボリス・ゴドゥノフは完全なマキャベリストである。またジェニイ・ダカン嬢宛一八三二年八月八日付書簡、スタンダール宛一八三一年五月一日付書簡などに、こうした人生観が示されている）。

四、民衆悲劇

以上見て来た通り、メリメは決して、この流産に終つた革命の主人公たちに同情を抱いていない。彼はありのまゝの現実を語つただけである。圧制者に対する個人感情的な憎悪もなければ、虐殺される農民に対する感傷的な憐憫もない。またバルザックの「農民」に見られる様な、作者の恐怖に近い農民嫌悪もない。政治的にも作者の立場は全く無色といつていい位である。メリメはたゞ、百年戦争

下の無政府的な現実を、一つのエピソードとして、正確冷静に扱えようとする。われわれは、一八二八年のフランス社会の偏見を知らない故に、当時にあつては、痛烈なイロニイであつたらう部分も、たゞ、鋭いメリメの社会洞察、公平なリアリズムとしか感じない。従つて、この作品の価値は、作者の感傷不在という点であり、ありのまゝの事実が与える無限の暗示である。

少くも、人間社会の悲劇に関して、作者は圧制者にも、被圧政者にも、両者に責を認めている。だが、われ／＼がアラゴンの評価を意識する一方で強調すべきは、民衆の責についてであり、咎むべきは、彼らの不徳、依頼心なのだ。

まず滑稽な偏見がある。偏見の価値は永遠不変なものでなく、相對的な意味しかない。次に民衆は、明瞭な政治理念もなければ、自らの悲惨を社会的な、広大な見通しにおいて考えようとせず、時代的歴史的洞察力を欠く。そこから、現代のわれわれにとつて、この作品の全体がアッピールしているのは、民衆教化の必要性であり、自覺的な考える民衆の出現である。メリメはそれに絶望してか、あるいは解決策としてか、エリート、有益な少数意見による歴史の運営を計ろうとした。だが、このエリートは、彼の民衆観からして、当然忘恩を覚悟せねばならぬ。ここに彼の英雄たちは殉教者の風貌を持つている。彼のパシニスムはここに至つて極地に達する。それはまさしく、民衆の、民衆による悲劇なのだ。

五、メリメ政治文学における

「ジャッククワイ」の位置

メリメは、彼の人生に対する諦観にもかかわらず、一生を通じ

て、人間の闘争を彼の文学活動の主要テーマとして固執した。「クララ・ガスルの戯曲」は、文学的に、宗教的に、政治的に、充分反抗的な、当代意識の強い作品であった。その中でも「デンマークのスペイン人」では、祖国の自由独立のために、ナポレオンに対して立ち上るスペインの愛国者を舞台にのせた。ここでメリメは、眞の愛国心の何なるかについて詰っている。それに對し、「ジャッククリイ」の中に現われる愛国心の諸形態は、いづれも、土地感情としてのみ愛郷心、及び利己的に用立てられた愛国心であった。土地感情としての愛国心は素朴な本能であるが、人間生活存亡の危機に係したもとしては扱えられていない。ここでは愛国心テーマよりも階級の対立がより前面に、中心問題となつて表われる。それのみならず、ここに現われる愛国心は、全て、階級の利益をチェックする。なまじつかな愛国心に対する作者の疑問が感じられる。こうした悩みは、遂にメリメをして、偏見からの脱出という方向に向わせた。だが、メリメは、死を前に控えた普仏戦争勃発時に至つて、自分の宿命的な愛国感情を告白した。

「私は、一生を通じて、偏見から解放されようとして求め、フランス人である前に世界の市民citoyenであろうと求めて参りました。しかし、あらゆるこうした哲学的な外套は何の役にも立ちません。私は今日フランス人のあの低能共の傷口を刺絡してやっているので、私は彼らの屈辱的な行為の数々に對し涙を流しているのです、そして、連中がいかに恩知らずで、馬鹿げているにせよ、私はやはりいつも連中を愛しているのです。」(ド・ボランクール夫人宛、一八七〇年九月十三日付書簡)

多くのメリメ学者たちはここに、あの冷めたい外観の奥深くに燃

えていたメリメの人類愛と祖国愛を認めている(ポール・アルブレ及び Augustin Filon : 《Mrimée et ses amis》参照)

おそらく、メリメは結論的に、普遍的な人類愛を根底とした愛国心以外は全て、似而非愛国心であることを知らされたことであろう。愛国心を扱つたテーマとしては、後に「ドン・ペードル一世」《Don Pedro Ier》や、「昔のコザックたち」《Cosagues d'autrefois》における二人の英雄ボグダン・シユミエルニッキイとステンカ・ラージンにおいて發展した。また「シャルル九世年代記」もこの系列に入れられようか。

他方、階級闘争としては、短篇小説「タマンゴ」《Tamango》の中で、象徴的に扱われた。ここでメリメは、明確に、革命運動の空しさと、モップの愚劣さ、狂暴性、及びエリートの必要性と孤独性を表明した。この作品こそ「ジャッククリイ」の延長線上にあり、一つの結論である。後期に至つて「社会戦争」《La Guerre sociale》と「カチリナの陰謀」《Conjuration de Catilina》の二つのローマ史研究、更に「にせのドミトリウス」などで、階級闘争や革命運動が取上げられるが、いづれも「ジャッククリイ」に見られる大綱は変つていないのである。そしてこれらがいづれも、最終的に実を結ばなかった革命運動ばかりであり、フランス大革命のごとき成功した運動をメリメは扱っていないことに注目しよう。以上の様な作品の中で、メリメのマキャベリズム信奉と、大衆不信あるいは蔑視の政治思想はますます明らかになる。そして、愛国心の問題と階級闘争の問題は、彼の政治的歴史文学における二大テーマであり、メリメはいづれも偏見脱却という態度から眺めようとする。

この様に「ジャッククリイ」は、七月革命と「エルナニ」の勝利を前にしたメリメが、ロマンチックの一人として活躍した時代の作品にもかかわらず、既に彼の高踏的な精神が見え、後の史伝物への基礎的要素をもっている。彼は、こうした社会問題を、分析的態度ではなく脱却的態度をもって追及した。従ってこの作品は、一八二八年のフランスの社会的現実に対して、おそらく、闘争的反抗というよりも、イロニクな反抗の域に止まっている。これは、アラゴンの云っている様に、シャルル十世治下の反動体制が原因なのかもしれない。

六、結論。現代日本社会と「ジャック

クリイ」

止み難いペシミズム、民衆蔑視の哲学は、現代日本人の反感こそ買え、何の存在理由も見出さないとする根拠は何もない。

アラゴンは、パリ解放間もない時代に、この作品の社会主義レアリズム的な価値を認識した。だが、一九六〇年のわれわれに参考となる部分は、この作品のオプチミズムではない。この作品ではオプチミズムは否定し去られてあり、この中世の民衆暴動が残したものは、破壊のみである様に描かれ、絶望的な、思い切り陰鬱な作品であることは前に触れた通りである。まして、この作品において、暴力にエネルギーが与えられることによって、読者を印象づけようと作者は欲していない。メリメは暴力革命の愚劣さを充分に心得ている。

だが、この歴史文学に登場する様々のグループは、現代日本の悪徳をなす様々なグループ対立にコレスポンドするものと見られなく

もない。そこに民衆が踊らされている。「ジャッククリイ」の愚衆の悲劇、無自覚で盲目的行動の悲劇は、明日の日本の悲劇を示している。一つの組織に巻き込まれ、機械的なマッスの力が暗黒の深淵にわれ／＼を導こうとしている時、白痴化運動と消費文化、慣れ合いの政治運動が民衆を上機嫌にしている時、諦めの中で、自分だけの小さな幸福に安住しようとする日本人気質が抜け切らない時、個人に対して社会的な連帯意識の必要性をこの作品は痛感させてくれる。この民衆蔑視の文学が、一人一人の日本人に「物を考へること」の重大性を教えてくれる。それはマス・コミュニケーション下の個人への警告だ。見る前に跳ぶことが当代の美德とされ、思考よりも行動が尊敬され、形而上学よりも唯物論が巾を効かせる廿世紀後半の日本人は、希望がない、われ／＼は袋小路に入っている、とわめきながらも、実は結構陽気なのだ。人は、一度全てに本当に絶望してみることが必要だと思う、「ジャッククリイ」と共に。すると、本当に新しい社会創成が次の段階で発露する。

(1960. 3. 16)